

# 21 世紀のコミュニティ像を求めて

— まちに生きることの再発見

Seeking the community image of the 21st century:  
Rediscovery of living in city

藪 田 碩 哉

生活福祉学科教授

## 抄録

現在の日本社会の特徴はコミュニティの衰退にある。それは不揃いな街並みを見れば一目瞭然であり、近隣関係の貧弱さや地域の教育力、福祉力の低下となって現れている。それはまた、子どもたちの社会化を妨げ、独居老人の孤独死をもたらしている。これからの課題はコミュニティ意識を取り戻し、それを基盤に地域の商業や文化活動やレクリエーションの活性化を図ることである。そのために大学が果たす役割も決して無視できない。短大や地域での筆者の活動を踏まえながら、これからの社会でコミュニティの果たす役割を検討する。

## Abstract

The serious problem of present Japanese society is in the decline of the community. It is obvious if an uneven street is seen. It becomes a decrease in educational power and the welfare power because of the poor relationship of neighborhood. It appears, children's socializations are disturbed, and solitary old people's lonely death has been brought though.

The subject in the future is to regain the sense of community, and to aim at commerce in the region, cultural activities, and the activation of the recreation based on it. The role that the university plays cannot be disregarded for that. In this paper I want to show the possibility of the community that plays in the society of the future, referring to the activities of the author in the junior college and in the region called Tama-newtown.

キーワード：まちづくり、コミュニティ、地域福祉

Key words : city planning, community, regional welfare

## 1. 衰退するコミュニティ

### ●コミュニティの風景

日本の「まち」を歩いていていつも感じられるのは街並みの不揃いということである。どんな町でもいい、鉄道の駅を降りてメインストリートを歩いてみると、道の両側に連続する建物が全く何の秩序もなく並んでいることに気づかされる。建物の高さや大きさがバラバラなことから始まって、デザインや色調に何の一貫性もない光景が続いて行く。1つ1つの建造物は必ずしも不出来なわけではなく、さまざまな素材を使い、デザイン的な工夫もあって、心地よい印象を与えるビルが決して少なくはない。しかし、それらを連ねた「街並み」として見直すと、そのアナキーぶりが目立ってくる。たとえば言えば1つ1つの音は美しいが、その並べ方に何の秩序もないデタラメな音楽を聴いているようなものである。

翻って西欧の都市はどうだろう。パリやロンドンのような大都市でも田舎の小都市でも、街並みの美しさは見事というほかない。高さの統一、色調やデザインの一貫性があり、建物群の連続性があたかも1つの楽曲のようにまとまった印象を与え、通りを歩くことの楽しさを倍加させてくれる。そして統一感のある街並みを成立させている条件は、何と言ってもそこに住む人々の街並みづくりへの強い意志であり、それを支えるコミュニティ意識を措いて他にはない。ヨーロッパの町の美しさは中世以来、封建体制に抗して自由な町を創造し、防衛して来たかつてのブルジョア（ブルグ＝町に住む人＝市民）の心意気が礎石になっているのである。

実のところ、日本にも美しい街並みがないわけではない。文化庁の指定する「伝統的建造物群保存地区」（略して「伝建」と呼ばれている）は1975年の初指定以来、年々数を増やして現在は83地区に及んでいる。それらには宿場町、門前町、鉾山町、商家町などさまざまな種類があるが、いずれもそこに住む人々（町衆）が強固な連帯感をもって共に創りあげてきた街並みである。それらは封建諸侯のシンボルと言うべき城郭に対抗して、団結する民衆の力と意気を感じさせる。街並みという集合的な構築物は「コミュニティ」という共同意識の具体的な現れに他ならない（註1）。



写真1：肥前浜宿（佐賀県）の街並み  
酒蔵と居倉造町家が並ぶ浜中町八本木地区の醸造町（筆者撮影）

日本にも街並みはある。しかし、それらはすでに失われた遙かな過去の遺産に過ぎない。現在の日本の都市の街並みが、ごく少数の例外を除いて、ほとんど見るに耐えないのは、街並みを支えるコミュニティ意識の衰退が大きな理由というべきだろう。現代人には「わが家」「わが会社」への思い入れはあっても「わが町」意識は希薄である。立派で美しい個人住宅や社屋はいくらでも見いだせるが、それらを並べて全体の調和や総合の美を追究しようという意欲は生まれてこない。かつて「日本的集団主義」の名の下に、日本人の個性の無さと集団の結束力の強さがよく指摘されたものだが、こと街並みで見ると、日本人の集団主義は一挙に吹き飛んで、ほとんどアナーキーとも言える個の主張ばかりが目立つのはなぜなのだろうか。

行政マンとして横浜市の都市計画に関わって大きな役割を演じ、その後は研究者として積極的にまちづくりに参画している田村明は言っている。「都市景観の美しさをつくる一番元になるものは市民のココロだろう。さらに言えば、魂と言うべき次元だ。都市の景観とは、実は生きた都市のココロ、都市の魂が表現されたものではないだろうか。(註2)」日本の津々浦々で市民のココロのルネッサンスが求められる所以である。

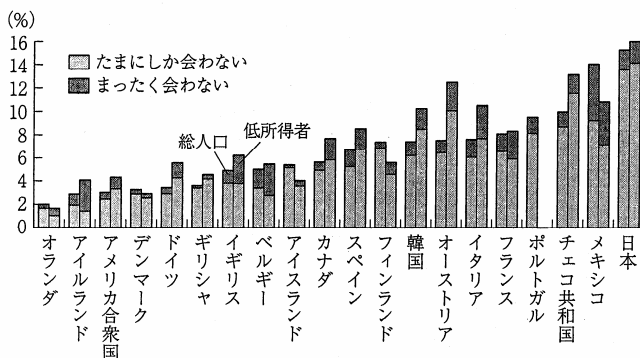
### ●コンビニ・コミュニティと不信の社会

まちを歩くと目につくのは「コンビニ」である。そここの街角に、至る所にコンビニは存在し、こんなに数が多くては商売としてやっていけるのかと心配になるほどである。日本全体のコンビニの店舗数は約4万軒で小学校の数とほぼ同じである。コミュニティを象徴する施設として小学校をあげることに異論はないだろうが、同時にコンビニもいまやコミュニティの必須のアイテムと言ってよい。

街のあちこちにあるコンビニは、日常生活においてどのような役割を担っているのだろうか。むろん、日用雑貨や食糧品を手軽に買い求めることが出来るコンビニエントな店ということなのだが、それがかくまで浸透したことの理由は何だろうか。かつての(昭和30年代ぐらいまでの)地域社会の生活を振り返ってみると、隣近所の日常的な助け合い活動が頻繁に行われていたことが思い起こされる。そこでは、たまたま手元に見あたらない日常用品を借りに行ったり、ちょっとした用事を頼んだり、お金の貸し借りをすることさえもさほど珍しくなかった。筆者は、横浜の下町の商店街で生まれ育ち、両隣りは畳店と食堂だった。畳屋さんは子沢山で生活に追われていたようで、畳屋のおばさんが我が家の台所にやって来てお米を借りていくようなことをよく目にした。文房具とかちょっとした道具の貸し借りは、日常茶飯事のように行われていた。しかし現在、もはやそういった濃密な近隣関係はよほど困難になってしまい、もし隣の家に上がり込んで何かを持ち去ったりしようものなら、間違いなく犯罪として指弾されるだろう。何によらず何時でも食べ物や生活雑貨が買えるコンビニエンスストアは、失われてしまった近隣の相互扶助活動を埋め合わせるための装置という一面がある。そればかりか、コンビニの門前に座り込んで何とはないおしゃべりに興じている高校生の群れを見たりすると、コンビニにはかつての隣近所の井戸端会議や町内の寄り合い所の代用を務めるコミュニティの交流施設としての機能もあるのかもしれない。

かつては家庭の主婦が当然の務めとして行っていた家事一般、掃除、炊事、洗濯、育児のような活動が、次第に主婦の手を放れ、商業的なサービスとしてお金を払って行われるようになる現象は「家事の社会化」と呼ばれている。その中でも、逆の面から見れば、衰退したコミュニティを反映している活動がありそうだ。かつてのは子育てにおいては、かなりの程度隣り近所を当てにすることができた。「ちょっとお使いに出るから」と隣家の主婦に自分の子どもの世話を頼むというようなことがごく自然に行われてきた。隣近所の人々は、自分の子どもだけではなく、隣家の子どもの世話をすること、しつけをすることを、当然のことと考えてきた。しかし現在では、何らかのリスクが生じるような事柄を、たとえ親しい関係にあっても依頼することは難しい。近所の子どもが泣いていても下手に声をかけない方がよい、余計なことをされて迷惑と捉える親が増えている。悪いことをしている子を叱ると、その親が感謝するどころか、他人事に干渉したと文句を言われる始末となる。子供を預けるには、行政や NPO が責任を持って経営する保育園や子育て支援センターを利用するしかないのである。

コミュニティの土台となるべき地域住民の互いの信頼関係は明らかに低下してしまった。小さな失敗であってもそれに対する寛容度も低くなった。隣近所はなるべく関わり合わずに生きるのが得策ということになっている。広井良典が紹介している OECD の資料を見ると、日本は「社交のために友人、同僚、または家族以外の者と、まったくあるいはごくたまにしか会わない」という回答をした割合が最も高い (図参照)。広井はその理由を、「ウチ」と「ソト」を明確に区分する「農村型の関係性」が未だに維持され、「個人が独立しつつさまざまなつながりやネットワークを作っていく「都市型の関係性」が未成熟である点に求めている (註3)。しかし、昭和 30 年代ぐらいまでの下町は、この都市型の関係性のある程度は発展させていたとも言えるのではないか。それ以後の高度成長期、さらには近年の競争型の社会が、そうした芽を摘み、後退させたことは明らかであろう。開かれた近隣関係を土台に置いた、気軽でのどかなコミュニティは忘れられて、現在の日本社会では、信頼の原則ならぬ不信の原則が地域コミュニティを支配しているのである。



図：OECD加盟国における社会的孤立の状況 (出所)OECD (2005)

(注)この主観的な孤立の測定は、社交のために友人、同僚または家族以外の者と、まったくあるいはごくたまにしか会わないと示した回答者の割合をいう。図における国の並びは社会的孤立の割合である。低所得者とは、回答者により報告された、所得分布下位3割に位置するものである。

広井良典『グローバル定常化社会』

## 2. コミュニティと教育・福祉・産業

### ●コミュニティと体験学習

人の間を生きて、動物としてのヒトから文化を持った「人間」となるわれわれにとって、人間関係を学ぶことは成長、発達に欠かせないカリキュラムである。かつての社会ではその課題は大家族と地域コミュニティにおいて十分に果たされた。3世代にわたる大人数の家族はその中にタテ、ヨコ、ナナメの複雑な人間関係を含み、あたかも小さな社会とも呼びうる場所だった。そこで子供たちは人と人との付き合い方、口のきき方、礼儀作法を学んでいった。近隣の家々との関わりも先述したように十分に濃密で、隣近所の大人と子供たちとつきあいが社会を生きる人間としての知識やスキルを体験的に学ぶ機会となった。旧来のコミュニティは「人を育てる」機能をそれなりに発揮していたのである。

しかし、現在の家庭と地域は、子供たちに他者との関わりを学ばせる場としての機能を大きく失ってしまった。都市の家庭はほとんどが二世帯家族で、兄弟の数も一時代前に比べて激減した。昭和前期までは4～5人が兄弟の平均的な数であったが、今では圧倒的に2人兄弟が多く、1人っ子も少なくない。3人、4人、まして5人以上の兄弟などは滅多に見ることができない。兄弟に付き物の兄弟喧嘩も、たった二人ではあまりに単純になって、人間関係の機微を学ぶ場にはなりにくい。核家族という場所は人間関係的にはきわめて貧弱で縦の関係に乏しく、家庭生活のルールやマナーを十分に伝えることができなくなっている。家庭を取り巻く地域社会も、前項でみたように、人と人との関わりを求めるところか避ける傾向が強くなって、地域コミュニティの文化を若い世代に伝える働きをほとんど失ってしまった。小さく孤立した家庭と地域の希薄な人間関係の中では、子供の発達に不可欠な「人間関係力」を磨くことはほとんど絶望的といえよう。

その欠落を埋め合わせるべき学校においても、子供たちの間に活発な相互作用を生み出す課題が十分に追及されていないように思われる。学級会活動やクラブ活動や学校行事がかつての創造性や活力を失いつつあり、放課後の運動部や文化部の「部活」が、面倒を見る教員がいないため成立しないような学校も現れてきた。その代わりに活性化しているのはお稽古教室や学習塾で、そこには確かにある程度人間関係トレーニングの機会があるかも知れないが、それは明らかに主要な課題とは考えられていないし、コミュニティとのつながりは薄い。こうして子供たちは人との関わりを学ぶ機会を十分に与えられないまま一般社会へ押し出されていく。最近、顕著に現れてきた若者たちのコミュニケーション障害の一因を、コミュニティの衰退に求めることはあながち無理な立論ではないと思われる。

そこで今後の課題として、コミュニティの存在価値を子供たち青年たちの体験学習の場として見直すことを提言したい。人は体験によって多くのことを学んできた。昔の職人たちは親方から組織的・体系的な教育を施されることはなかったが、親方の仕事を見よう見まねで体験しつつ、自分の能力を広げ深めていった。何も教えてもらえないから自ら進んで親方たちの技術を盗む必要があり、またそのことが奨励された。徒弟たちは初めは仕事現場の周辺に置かれていたが、次第にその中心へ入り込んでゆき、年数を経るうちにいつのまにか一人前の職人として必要な知識

と技術を体得したのである。これと同様にかつてのコミュニティは子供たちの遊びから青年たちの社会活動に至る多様な機会を用意して、それとは意識されない地域体験活動を推進していたとみることができる。

子供たちはまず集団遊びを通して、自らの身体を操る術を発達させ、また仲間との協力や集団の約束ごとについて学んだ。長ずるに及んで地域社会は若者たちに様々な年中行事を通じて社会参加の機会を提供した。祭りはその最たるもので、若者たちは神輿を担いだり、地域の芸能を演じたり、また、祭りの裏方としての様々な役割を果たすことによって地域社会を支えるメンバーとしての自覚を持った。祭りは地域の最大の娯楽の場として人々の生きるエネルギーを解放したが、同時に今でいうところのコミュニティ意識を鍛えるまたとない機会としても重要な位置を占めていた。こうした仕掛けと仕組みを現在の地域に復興することは決して不可能ではないばかりか、地域社会の未来を育てるために避けて通ることのできないテーマである(註4)。

付言すると、コミュニティの教育力は学校教育本来の課題とも深く関わっている。最近、全国学力テストが実施され、諸外国と比較した日本の子どもたちの学力不足が指摘されている。その問題点は「活用力」の不足にあるという。「全国学力テスト」を批判する尾木直樹は、今日の社会で求められている「学力」とは「自らの人生をつくり社会に参加する力」であり、「単純な詰め込み暗記型ではなく、きわめて文脈的であり、包括的・社会参加型のダイナミックな“リテラシー”」なのだと述べている(註5)。単なる情報の記憶でなく、知識を使いこなす能力は、学んだ知識を実際の・具体的な体験の中で生かして、はじめて血肉化するはずである。その体験を供給できるのは学校の内部ではなく地域社会に他ならない。コミュニティと深く関わる体験学習を「学社融合」の理念のもとに幅広く展開することができれば、日本の子どもの真の学力は飛躍的に向上するだろう。

### ●高齢者をどうサポートするか

地域社会は人間教育の場であるとともに、また地域福祉のフィールドでもある。かつての地域社会における高齢者たちは、現在と比べてみるとより多く近隣の仲間たちとの関わりを持っていた。日常的には家々の縁側を活用した茶飲み話が円滑なコミュニケーションを促し、祭りをはじめとする地域の年中行事との関わり、頼母子講のような相互扶助の仕組みなどを通して、地域の高齢者も自分たちの居場所を確保することができた。現在の用語に翻訳すれば、デイサービスやケアセンターを隣近所の付き合いを通して自主的に実現していたということもできる。

現在の高齢者の大きな問題は、「閉じこもり」と言われる現象である。子供を育て、子供たちが巣立って老夫婦2人の生活が訪れ、やがて配偶者のどちらかが亡くなって独り暮らしになる——これは大多数の市民が通り抜けていくコースである。だが、現在の地域社会には独居老人の繋がりを生み出す仕組みがほとんど存在しなくなってしまったため、多くの高齢者が周りとの付き合いを極小化した閉じこもり状態に陥ってしまう。毎日の生活そのものは、それなりに便利に過ごすことができるが(コンビニの存在!),それも身体が丈夫なうちだけであって、一たび病を得れば、たった一人で生きるとはまことに困難である。家族も頼りにならず、近隣も支えてはくれ

ず、老人病院や老人ホームに収容されるのが一般的なコースになってしまったが、多くの人々は施設の生活を嫌って自立して生きたいと願っている。だが頑張っ一人暮らしを続けたあげく、急な病気に倒れて、そのまま看取る人もなく死亡するというケースも決して少なくない。現在、高齢化率は2割を超えようとしているが、その中で独居高齢者の率は年々増加し、古い団地など地域によってはそれが4割～5割に迫るような超高齢化コミュニティが存在する。数メートル離れた隣家には住民がいるというのに、誰にも気づかれず死んでいく人が後を絶たないという状況はコミュニティ不全の現況を如実に示している。

こうした事態を防ぐために、各地の自治体で高齢者の見守り活動が行われるようになった。日野市でも「高齢者見守り支援ネットワーク」を構築して、見守られることを希望する高齢者と見守ることを引き受けたボランティアの日常的なコミュニケーションづくりに努めている(註6)。しかし、プライバシーが問題になる現在の社会では、他人の暮らしぶりに問題を感じたとしても勝手に見守ることはできない。それはあくまで見守られる人の希望と同意に基づいた支援活動にならざるを得ない。閉じこもり傾向の強い高齢者は、近隣とのつながりを拒否しがちで、そういう人たちにどのような手を差し伸べたらいいのか、これはなかなか難問である。結局、閉じこもりになる前の元気な段階からコミュニティの人間関係をしっかり作り上げていくことがどうしても必要になる。この課題を達成するために、高齢者の居場所やたまり場づくりの重要性が叫ばれるようになり、各地でミニ・デイサービスやコミュニティ・カフェの活動が活発になってきた。使われていない民家や商売を辞めてしまった商店を会場にして、地域の高齢者が定期的に会合を持ち、若い世代から中高年に至るボランティアが様々なプログラムを持ち寄って、ともに良い時間を過ごす、という試みは、かつての地域社会のお茶飲み場の復興とも言うことができるであろう。こうした事業を通じて地域の福祉力を引き出すことがこれからの日本の社会づくりに重要な課題となるであろう(日野市での試みは後述する)。

### ●シャッター商店街の未来

シャッター商店街ということが言われて久しい。地方都市に行くとも駅前が目抜き通りでさえもシャッターを下ろした商店が目立つ。街は人影がまばらでにぎわいに欠け、いかにもさびれた印象を与える。いったい買い物客たちはどこへ行ってしまったのだろうか。目を転じて郊外を見渡すと、畑の中に、とはいえ幹線道路沿いではあるが、大きなショッピングモールが作られていて、たくさんの車が止まっている。若い家族連れが目立ち、買い物やレストランでの食事を楽しんでいる。近郷近在の消費者たちは駅前を忘れて新しい買い物天国に吸い寄せられ、家族レジャーに余念がない。

車社会に対応できなかった駅前商店街には、もはや未来はないのだろうか。実際多くの商店街はすっかり自信を失ってしまい、「わが店も自分の代限りで終わりか」と覚悟を決めている店主も多いように見受けられる。日野市の旧本陣を中心とする甲州街道沿いの商店街は「ふれあい商店会」という組織を作っているが、そこを取材してみると、30数軒の会員のなかで、次代の後継者が決まっているのはわずか二軒のみで、他は老いた店主が「元気なうちは何とかやっていこ

う、しかし身体が動かなくなれば店も畳む」と思い定めている。農村の「じいちゃん・ばあちゃん農業」に対応して、都会では「じいちゃん・ばあちゃん商業」が広がっているのである。

商店街の再生に取り組んでいる地域も決して少なくはない。三重県四日市市の「こだわり商店街創出事業」をはじめ、さまざまな成功例も報告されている(註7)。それらに共通するのは、商店街の再生を単にそれぞれの店の宣伝やディスプレイの工夫のような個別の対応のみで考えるのではなく、地域コミュニティ全体の課題として、商業を核とし、まちづくりに繋げていこうとしている点である。商店街の中の空きスペースを活用して、若者向きの音楽ライブを行うとか、地域の歴史や産物にちなんだ多様なイベントを考えて、広い範囲から訪れる客を増やそうと努力している。車社会へ対応するために廃業した店舗を再活用して駐車場を設けるとか、公共のミニバスを走らせるとか足の工夫も行われている。駅前商店街は鉄道の駅の近くにあるわけだから、鉄道輸送との繋がりを強化することも欠かせない課題となる。環境問題が大きな関心と呼び、車社会への見直しが進めば、利用客の減った鉄道に再び人が戻ってくる可能性もなしとしない。また、高齢者をはじめ高まる「歩く志向」に応えて、散歩して気持ちのいい楽しい街を作れば、商店街の再生も合わせて期待できる。この点では一章で述べた街並みづくりが重要なテーマとなるだろう。

埼玉県川越市のシンボルである、黒くどっしりした蔵造りの街並みは、前述の「伝建」にも指定されている由緒正しい歴史遺産であるが、同時に現在も活発に息づいている商店街であり、誰もが歩いてみたくなる空間である。蔵造りのまちははずれに、近年になって新たに作られた「駄菓子屋横町」は、東京はじめ他県からの客も集めて、なかなかのにぎわいを見せている。歩いて楽しい街、心を引くイベント、これに土地の人たちのホスピタリティ・マインドが加われば、再び小都市とその中心街の商店に多くの人々が帰ってくる日が来るかもしれない。そして、その原動力となるのは、やはり住んでいる人々のコミュニティ意識の高揚でなくてはならない。

### 3. コミュニティ開発のシナリオ

#### ●高齢者と学生の「ふれあいサロン」

未来を開くための大きな可能性を持ちながら、現状では疲弊しているコミュニティをいかに活性化するか。この課題を筆者自らの活動をふまえて考えてみたい。

まずは、実践女子短大の所在地である日野市で学生とともにやっている「百草ふれあいサロン」の活動を紹介しよう。昭和40年代に作られた百草団地はおきまりの高齢化が進み、独居老人が少なくない。商店街はそれなりにがんばっているが、その一角のそば屋が廃業してしまった。日野市は東京都の補助金を活用して、この店をコミュニティ・カフェに改造し、自治会を核とする運営委員会が「百草ふれあいサロン」として運営することになった(この活動は前述の「高齢者見守り支援ネットワーク」の新展開の事業として位置づけられている)。明るい店内には花や絵が飾られ、コーヒーは1杯100円でおかわり自由。月曜から金曜までの朝11時から午後4時まで開店している。店内は談笑する人、雑誌に目を通す人、将棋盤を囲んで棋戦に余念がない人と多彩。



高齢者が主力だが、子ども連れの若い母親も時折姿を見せる。2008年度には一日平均28人、年間で5,100人ほどの利用者があった(註8)。

そんなカフェのプログラムの1つとして、実践短大の学生が月に一度の「実践ふれあいサロン」を開いている。1時間ほどのプログラムを考え、準備から進行まで学生グループが取り仕切る。内容はとりどりで、導入の歌や体操に始まり、ゲームをしたり、ちぎり絵に挑戦したり、七夕の笹飾りを作ったり、クリスマスはツリーを飾ってキャロルを歌うといった流れである。短い時間ではあるが、学生たちが主体的に取り組むところに価値がある。テーブルを囲んでの自由な話し合いの時間もしっかり取って、コーヒーを飲みながら和やかに語り合う。孫ほども年の離れた若い世代との交流は高齢者にとって新鮮な刺激となり、学生にとっても貴重な「コミュニティ体験」の場となっている。



写真2：百草団地ふれあいサロンでの一こま(2009年10月)

このサロンは言わば短大から出かけていく「出前のサロン」であるが、本拠地の短大を会場にして周辺の高齢者を招いて行う「短大ふれあいサロン」も、前・後期にそれぞれ2～3回の開催ペースで続けている。内容は歌や体操やゲームなどの交流プログラムに加えて、体育館を利用した体力測定の会があったり、秋には短大の恒例行事となった造型展「かたち・ふれあい展」を活用した鑑賞会なども行われている。さらに、高齢者対象だけでなく、近くの第7小学校の放課後プラン「ひのっち」に出向いて、子どもたちとの交流を進めるプログラムを始め、デイサービス、老人ホーム、公民館、子育て支援センター、社会教育センター等での地域体験活動も生活福祉学科の特色ある事業として多様に進められてきた。大学がコミュニティとさまざまな接点を持つことは、これから特に重要な課題となると考えている。

これらの実践活動を通して筆者が追求しているのは「コミュニティ開発の可能性」ということである。2年生を対象にした「コミュニティ開発論」の授業では、何よりも学生が地域への「まなざし」を獲得することを目指したいと考えた。日野市における地域体験と並行して、それぞれの学生が住んでいる町の基本データを調べ、町の個性や特色を考えさせて「わがまち再発見」へ

動機付けようと試みている。その後に全国で展開されるユニークで面白い「まちづくり活動」の事例を読み解き、仕上げは自分の住む町を対象にして「まちづくりのアイデア開発」に挑戦している。いつの日か、学生たちがどこかの地域で家庭を築き、子育てに関わるようになったとき、コミュニティのあり方に関心を持ち、積極的に地域への参画を試みてほしいと願っている。

### ●コミュニティを耕す「NPOさんさんくらぶ」

筆者自身は住まいのある多摩ニュータウン全域で、「NPOさんさんくらぶ」という市民組織をつくり、多彩なコミュニティ活動に挑戦してきた。その母体は1979年から30年続けた自然型幼児教育の場としての「さんさん幼稚園」の活動で(註9)、そこで培われた父母たち、子どもたちとのつながりを生かし、地域の教育、文化、福祉、環境保護にまたがる幅広い活動をNPOの旗の下で進めてきた。現在の主要な活動メニューは、①小学生の自然学校、②残された里山での田んぼ作り、③病院等でのボランティア活動、④講演会などの地域啓発活動、⑤ファミリー音楽活動などである。

近年特に力を入れている「ファミリー音楽」の活動は、家族単位の音楽活動を活性化し、コンサートを開いて発表の場を提供し、コミュニティの文化の質の向上に貢献したいという思いで取り組んできた。ピアノのお稽古をする子どもは多いが(調査をしてみると短大生の8割までが小学生の頃、ピアノを習っている)、その後の生活にその経験が活かされることは少なく、せっかくのピアノはたいていの家で宝の持ち腐れになっている。ピアノ体験を単なるお稽古ごとの枠から解き放ってコミュニティに向かって開き、「家族そろってアンサンブル」を旗印に、コミュニティ音楽の拡大をめざしたいと考えた。現在は、母親たちが作った9人編成のバンドや数ファミリーが結合した音楽隊、それに親子やきょうだいで合奏など多彩なプログラムが展開されている。身内のグループだけではなく、地域のコーラスグループなどにも働きかけを行って、多彩なプログラムのコンサートをめざしている(註10)。



写真3:「さんさんファミリーコンサート」の情景

この活動を進めるために、地域の広報誌などを丹念に点検してみると、思いの外、多彩で数多い音楽活動が展開されていることに気づかされた。地域のホールはそれらのグループの公演で埋

め尽くされ、土曜・日曜はなかなか予約が取れないのが現状である。実際に公演を聴きに行ってみると水準の高いグループも少なくない。多摩市の鶴牧地区にある「トムハウス」という地区センターでは、かなりの頻度で音楽会が開かれているが、中にはプロとして活躍されている演奏者もいて、少人数で聴くのがもったいないようなコンサートもある。多摩ニュータウンの文化水準は思っていたよりも高いというのが実感である。

地域の音楽活動を支えているのは演奏者も聴衆も、子どもや主婦、高齢者で、いわゆる「全日制市民」ばかりである。忙しい勤労者は「定時制市民」と言うべく、平日はもちろん、土日の会合にもなかなか出られないのが実情である。こうした事態の背後には、押しも押されぬ経済大国を自認しているながら、先進国随一の「余暇貧国」である日本の現実が暗い影を落としている。平日はおろか週末にも十分な余暇がなく、与えられているはずの有給休暇さえ満足に取れない状況では、自らの健康を守ることさえ覚束なく、ましてコミュニティの活動に参画することなど夢のまた夢になってしまう。このままでは、日本人の生活に文化の花が咲くことなど思いもよらないと言わざるを得ない。労働時間の制限とまとまった休暇の確立は、個人の健康で文化的な生活を保障するばかりでなく、地域社会の可能性を顕在化させるという見地からも、もっと真剣に取り組みなくてはならない。新たに誕生した民主党政権が未開拓なこの分野に光を当て、労働時間の制限をはじめとする積極的な余暇政策を打ち出すことを期待したい。

### ●定常型社会とコミュニティの時間

2008年夏のアメリカ経済の大崩壊以来、世界は大きく様変わりしようとしている。日本もこの激震の余波を受けて、ついに戦後半世紀以上も続いた自民党の政権が最終的に瓦解し、内政外交共に大きな転換が始まっている。自民党末期の小泉政権は、アメリカ主導の新自由主義に則った競争社会の追求にひた走ったが、その結果は当初目指されたはずの効率のよい、繁栄した社会どころか、格差が広がり、未来の見えない鬱屈した社会が出来上がってしまった。これからは競争よりも協調を合い言葉に、経済成長一辺倒ではない、環境と調和した福祉国家の建設が目標となるはずである。

この転換は、単に政権交代が行われ、国の運営方針が一変したというだけに止まらない、より大きな人類史的な転換の始まりと見ることはできないか。そうした見地から、人類は今、新たな「定常型社会」の門口にたっているとするのは広井良典・千葉大教授である。氏は伝統社会以来の人類の発展史を総覧して次のように論じている。伝統的な農業社会は、市場経済を創設して産業化＝工業化を推進し、ものとエネルギーの消費を飛躍的に拡大していく。科学技術の成果が存分に活用されて、われわれはそれ以前のどんな時代にも得られなかった物質的な豊かさや利便性を獲得する。産業社会は20世紀後半になると、情報化・金融化が進行し、ものの生産よりも、情報操作とマネーゲームによってさらなる富を増やして来た。しかし、21世紀に入って、右肩上がりの拡大路線にストップがかかってくる。経済がグローバル化して地球の隅々にまで産業社会の波が押し寄せ、従来の発展途上国が急激な成長路線を追求する（中国やインドなど、いわゆる BRICS の国々）に及んで、ついに地球の有限性という限界が見えてきてしまったのである。

資源やエネルギーには限りがある。このまま経済を拡大し続ければ、資源は枯渇し、エネルギーは底をつき、水や空気は汚染されて地球環境は急激に悪化する。もはや拡大ではなくて、現状維持と質の改善こそが課題となる「定常化」の時代に入ったのである、と(註11)。

広井氏の構想の中では「コミュニティ」に重要な意味が与えられている。コミュニティは個人と自然とを繋ぐ位置にあり、また中央・地方の政府に代表される「公」的な働きと、市場経済の核心である「私」との間にある「共」的な営みの場がコミュニティである。コミュニティにおいて人々は私利私欲的な「私」から抜け出して連帯し、自然との調和的な関係を築き上げることができる。また、社会を成り立たせる大きな「公」も、直接に個人をコントロールするのではなく、連帯する個人の「共」を通して作用することで、個人の自由と尊厳に立脚する社会運営が可能になる。つまりコミュニティは今後人類が目指すべき定常型社会の土台となる場ということになる。

広井氏はまた別の著書で、コミュニティに流れる時間の質を問うている。近代産業社会では時間もまた「消費」の対象となり、時間消費のための諸サービスが(スポーツにしる文化活動にしる)市場経済の一部を構成していた。しかし、コミュニティは「根源的な時間」の発見の場ではないかと広井氏は指摘している(註12)。そこで時間は、砂時計の砂のように使われてなくなってしまいう時間ではなく、私と他者とが出会い、互いに生かしあい、生きる意味を発見する、あるいは創りあげる場を流れる時間、永遠に回転する時間というべきだろうか。そこで広井氏は、慢性的な「生産過剰」状態にある先進諸国は、賃労働の時間を減らし、コミュニティや自然にかかわる活動や余暇への「時間の再配分」を行う必要があると説いている(註13)。それによって現在の市場経済がかかえている問題を克服しようというのである。

広井氏の論議は、筆者にミヒャエル・エンデの『モモ』を想起させる。広く知られたこのファンタジーは、不思議な少女モモが時間泥棒の灰色の男たちと闘い、時間の管理人であるマイスター・ホラの助けを借りて、町の住人たちの平和で親和的な日常を取り戻すという話である。筆者はこれを産業社会の効率的な時間観への批判、人々を離反させる競争の時間ではなく、連帯と協同の時間を回復させようという主張と読んできた(註14)。モモとその友人たちの暖かい関係こそがコミュニティの理想像であり、そこに流れるのがわれわれの生の目標としての根源的な時間なのではないだろうか。

#### <註>

- 1) 筆者は「余暇環境」という視点から街並みの探訪、研究を続けてきた。その成果は「余暇環境としての街並み考」『実践女子短大評論』22号(2001年)にまとめた。藪田碩哉『余暇の論理』2008年 叢文社に所収。
- 2) 田村明『まちづくりと景観』岩波新書 2005 225ページ
- 3) 広井良典『グローバル定常型社会』岩波書店 2009 191-2ページ
- 4) 体験学習の意味をレイブとウェンガーによる「状況的学習論」から捉え、地域を体験学習の場として活用する可能性を論じた文章として、藪田碩哉「地域という『実践共同体』が大学の学びを変える」(『地域を生き、地域に学ぶ』実践女子短大生活福祉学科 2007)がある。

- 5) 尾木直樹「全国学力テストはムダである」『世界』2009年11月号 85ページ以下
- 6) 東京都日野市における「高齢者見守り支援ネットワーク」の構築は、2004年度から進められ、最初の2年は資源・ニーズの把握とモデルシステムの構築と試行を行い、次の2年でネットワークを地域展開し、全市に広げた。2008年度からは新たな展開として「ふれあい交流型」のサロンづくりが行われている。推進委員会の委員長は筆者が務めてきた。
- 7) 大江正章『地域の力？ 食・農・まちづくり』岩波新書 2008 28ページ以降に「商店街は誰のものか」と題していくつかの事例が紹介されている。やりようによっては商店街も捨てたものではないということが分かる。
- 8) 『平成20年度 日野市高齢者見守り支援ネットワーク事業報告書』 日野市健康福祉部高齢福祉課
- 9) さんさん幼稚園の理念とその活動の詳細は、藺田碩哉「幼少年期の自然体験の意義とその回復策について——「さんさん幼稚園」の活動を通して」『実践女子短大紀要』29号 2008年を参照。
- 10) この音楽活動は立川市にある宗教法人真如苑からの市民活動助成を受けて進められている。
- 11) 広井前掲書。この書は、文明発祥のころから現代を経て未来までを展望し、「公—共—私」の枠組みを土台に来るべき「定常型社会」の大きな見取り図を描いている。そこでコミュニティは環境と福祉を結びつける結節点として大きな位置づけを与えられている。
- 12) 広井良典『定常型社会』岩波新書 2001 155ページ以下
- 13) 広井良典『コミュニティを問いなおす』ちくま新書 2009 152ページ。
- 14) 筆者の担当する「余暇生活論」の授業では毎年『モモ』の映画を鑑賞し、時間の意味を考えて来た。速度（距離／時間）や効率（生産量／時間）が目標になる社会でなく、それを転倒して「ゆっくり度」（時間／距離）や「じっくり度」（時間／生産量）が問われる社会をめざそうというのが結論である。